

書ける気がする、という感じだけがずっとあった。はじまりは十三歳のときで、年明けに日直が回ってきた。黒板を消すのと日誌を書くのが仕事で、黒板を消すと手がかゆくなるから嫌だったけど、日誌を書くのは嫌いではなかった。

日誌を提出するのは朝のホームルームの時間だったから、私は登校してから日誌を書けばいいと思っていて、それでいて校門を入ってすぐのところにある渡り廊下で先生に日誌の中身について話そうとしていたのだった（先生は毎朝渡り廊下の掃除をしていた）。渡り廊下の上にはすのこが敷き詰められていて、土足で上がることができた。先生はヒールのある靴を履いていて（すのこの目に挟まらない程度には太かった）、あの学校にはほかにヒールのある靴を履いている人はいなかったから、私（たち）は足音だけで先生を見分けることができた（そして先生の身長をからかうこともできた）。

その日も先生は渡り廊下の掃除をしていた。腰くらいまでの細い箒を持って、すのこの上にもった細かいほこりとか砂とかを、すのこの間から床に落とす。やっぱりヒールのある靴を履いていて、私は何となく目線を下げながら近づいたのだった（目礼、という言葉も知らなかった）。先生は私に気づいて、私は先生に日誌の内容を（これから書く予定で）話そうとして（今日はたぶんいい天気で）なんとなく挨拶などをしようとしたのを遮って（風は強かったかもしれない、スカートがひと二人分の幅をとって）先生は、今朝は寝癖が治らなくて、と言った。私はそこではじめて目線を上げて、やっぱり書ける気がする、という感じがあるのを確かめる。でも、先生に何を言えればいいのかはわからなかったし、先生が箒の指す先を見ているのに気付いただけだった。同じ場所に目線を向けたところで、漠然と、書ける気がする、と思うだけなのだった。

何となく黙り込むのがいやで、靴の中に砂が入って、と言いながら昇降口を通り過ぎ（ついでのように靴を履き替えて）教室に入る。机の中には、授業中にこっそり読もうと思ったネット小説のコピーが入っている。それが変わらずにあるのを確かめてから日誌を開く。やっぱり何かを書ける気がする、と思うが、書き始めない方がいいのかもしれないという気もして、窓の棧に乗っている、ほこりの塊を鉛筆で写しとうとする。風の強い校庭で、砂が舞って面白っぱいのがほこりの後ろにあった。